不登校児童生徒の学校復帰に向けた援助に関する研究
－フレンド学級での活動および家庭・学校・各適応指導教室との連携を通して－

河　野　晃　子
田　村　雅　彦

当教育研究所が運営するフレンド学級は、平成２年に開設された適応指導教室である。不登校児童生徒の心の居場所を保障しながら、集団に適応していく力を育て、最終的には個々の状況に合わせて学校復帰を図ることを目指している。

本研究では、これまでの取組みの成果を踏まえ、フレンド学級における活動、およびそこでのスタッフの指導・援助、さらには家庭・学校・県内の各適応指導教室との連携の効果的な在り方について、いくつかの新たな試みを加えた実践的な研究を行った。

〈キーワード〉　不登校児童生徒、適応指導教室、合同体験学習、連携、学校復帰

Ⅰ　主題設定の理由

本学級に在籍している児童生徒は、人間関係のトラブルや学力の遅れ等学校生活上の様々な問題によって何らかの傷つきを体験し、自尊感情や自己効力感が下がっている場合がほとんどであり、その結果として学校や仲間集団、あるいは自分がなすべき課題からの逃避が起こっている。決して、人間関係を持つこと自体を否定しているわけではなく、また学びを拒否してるわけでもない。自分が受け入れられ、かつ自分が生かせるような集団の中に入り、学ぶ楽しさと分かる喜びを求めている。

したがって、心の居場所と呼べる適切な環境が与えられ、そこで自尊感情や自己効力感を高められる経験ができれば、集団に適応していこうとする意欲はおのずと湧いてくるであろうし、さらに、ソーシャルスキルなどの集団に適応する技術や学校での授業についていく学力を身に付けられれば、多くの子どもの学校復帰が期待できる。

平成17年までの研究においても様々な活動プログラムが開発され、改良が続けられてきたが、より多くの児童生徒を学校復帰させるためにはまだ改善の余地があると思われる。そこで本研究では活動における効果的な指導・援助の在り方、家庭・学校・県内の各適応指導教室との連携の在り方、連携事業における児童生徒の活動プログラムについて見直しを図るため、本研究主題を設定した。

Ⅱ　研究の目標

1　フレンド学級の活動プログラム実施における効果的な指導・援助方法を工夫し、実践、評価する。
2　家庭・学校・各適応指導教室との連携において、より積極的な取組みと新しい工夫を実践、評価する。

Ⅲ　研究の方法

１　方　法

フレンド学級での児童生徒の活動、スタッフの学校や保護者との連携の取組みなどの実践を、観察法や自己評価票への記入などによって記録し、結果を分析する。

２　期　間

平成18年５月～平成19年４月

３　対象児童生徒

小学生　２名（５年生女子１名　６年生女子１名）
中学生　16名（１年生女子２名　２年生男子４名　２年生女子３名　３年生女子７名）

Ⅳ　研究の内容

１　フレンド学級での指導・援助

(1)　フレンド学級の概要

福井県教育研究所では、幼児から高校生までの子どもと保護者並びに教師を対象として、次のような過程で教育相談を行っている（図１）。

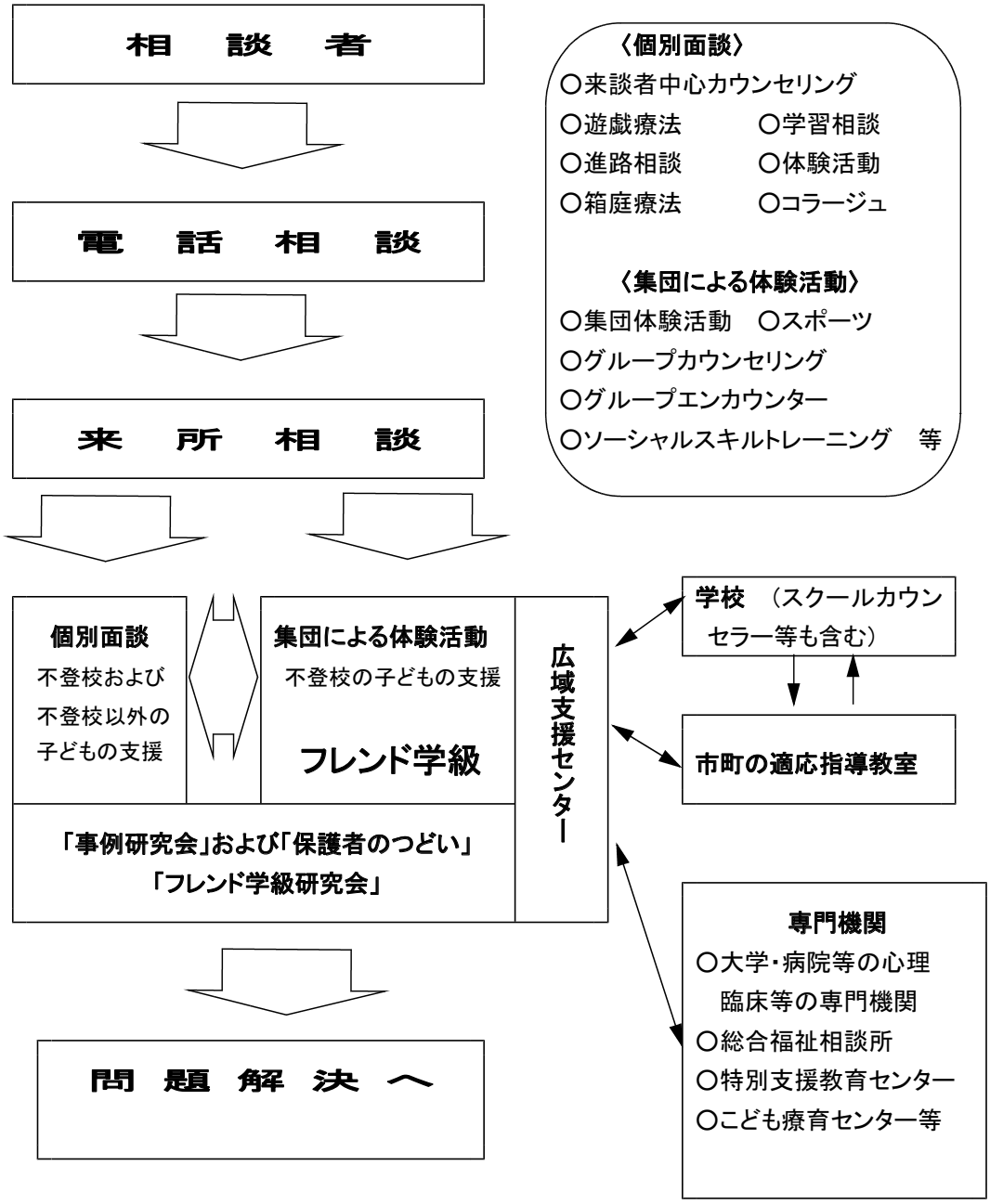

図１　フレンド学級の位置付け

フレンド学級は、不登校の小学３年生以上から中学生までを対象に、個別面談を行ったり、体験活動を通した人間関係づくりを促したりしている。年度を前期と後期に分け、それぞれ25回ずつ、合わせて50回実施している。活動内容および指導・援助方法は図２のとおりである。平成２年に開設し平成15年度からは文部科学省「スクーリング・サポート・ネットワーク（ＳＳＮ）整備事業」、平成19年度からは「問題を抱える子ども等の自立支援事業」により、福井県広域支援センターとして県下22の適応指導教室の中核的役割を担っている。

活 動 内 容

◎　通級日　　月・木…　9：30～14：30
　　前期25日　後期25日

◎　対　象　　小学３年生 ～ 中学３年生

◎　時間割

学級Ⅰ（月曜日）

9:30～ 9:50 おはようミーティング
10:00～10:50 マイスタディタイム
11:00～11:50 ふれあい広場
12:00～13:00 ランチタイム
13:00～14:10 フレンドタイム
14:20～14:30 さよならミーティング

学級Ⅱ（木曜日）

9:30～ 9:50 おはようミーティング
10:00～10:50 マイスタディタイム
11:00～11:50 マイプランタイム
12:00～13:00 ランチタイム
13:00～14:10 フレンドタイム
14:20～14:30 さよならミーティング

☆マイスタディタイム
　個別学習
☆ふれあい広場
　集団体験活動
☆マイプランタイム
　自主的活動
☆フレンドタイム
　集団スポーツ

指 導・援 助 方 法

「ホップ」
仲間やスタッフとの人間関係づくり
子どもの心の居場所を保障し、受容的に接していく。
マイスタディタイム、ふれあい広場、マイプランタイムなど

⇩

「ステップ」
スタッフ以外の人との人間関係づくり
生活習慣を段階的に身に付け、集団活動に自信が持てるように援助していく。
社会体験学習、手作り体験学習、一斉授業、（合同）宿泊体験学習、交流学習など

⇩

「ジャンプ」
学校の先生や友だちとの人間関係づくり
子どもの状況に合わせて、学校復帰への意欲を持たせていく。
学校の先生とのふれあい広場、チャレンジ期間（登校へ向けての働きかけ）など

図２　フレンド学級の活動内容　指導・援助方法

なお、学校復帰については明確な基準はなく、各適応指導教室によって様々なとらえ方があるが、フレンド学級においては次のように定義している。

学校復帰

- **学校に行けたという事実があること。**「学校に行ける」については、必ずしも教室に入ることではなく、相談室登校や保健室登校も含み、最低１時間以上は学校にいられる状態を指す。その間、何らかの活動や作業が行われるという意味を含んでいる。
- **登校が定期的であること。**「定期的である」とは、平均的に一定の割合で登校している状態（最低１週間に１回以上登校し、１ヶ月以上登校している状態）が認められることを指す。
- **児童生徒に回復傾向が認められること。**「回復傾向」の判断は、基準が曖昧で主観的なものであるが、スタッフ会議等で話し合い、主観性の客観化を図ることとする。
- **進路決定の意志が明確であること。**「進路決定の意志」の明確さとは、例えば、受験する高校が決まったとか、就職する会社が決まったとかである。

(2)　フレンド学級の活動プログラム

①　マイスタディタイム

学習の不安を感じている子どもたちに、「自分のペースを大事にしながら学ばせること」、「分かる喜びを実感させること」、「学習習慣を身に付けさせることで学習への不安を軽減すること」を図っている。子どもたちは自分で教科や学習の方法を決め、個別で学習に取り組んでいる（図３）。18年度は中学３年生が多かったので、受験に向けて別室で指導した。真剣に受験対策用の問題集に取り組んでいた。また、受験前には模擬面接を行い、子どもの不安を軽減することに努めた。期間の終わり頃には全員を対象に、学校復帰を意識した一斉授業も実施した（図４）。子どもの感想からは「分からなかったことが分かるようになった喜び」が感じられる（表１）。

図３　個別学習

図４　社会の一斉授業

表１　マイスタディタイムの感想

- 算数の割合のところは、むずかしいと思っていたけど、スタッフの人に教えてもらってよく分かってよかったです。自分でももっと勉強してみようと思いました。（小５Ａ子）
- 明日はテストなので、今日テスト範囲の単語練習をしました。久しぶりだったので、かなり忘れていました。でも、思い出すことができてよかったです。（中２Ａ男）
- 問題をしていて、昔の算数を思い出しました。むずかしいけどできてよかったです。（小６Ｂ子）
- 光の屈折がわからなかったけど、今日教えてもらったので、分かるようになりました。（中２Ｄ子）
- 高校受験に向けて面接練習をしました。初めてなのでとても緊張しました。声が小さいと言われたので、次はなるべく大きく出せるようにがんばろうと思います。（中３Ｆ子）

②　ふれあい広場

集団での活動や自己表現が苦手な子どもたちの緊張感をほぐしながら、仲間同士の温かい人間関係がもてるようにするとともに、「学ぶ楽しさ」を味わわせることをねらいとしている。表２は18年度の主な活動である。専門的な知識を持つ講師を多数依頼したり、何回か継続して取り組む活動を入れ

たりして、子どもたちの意欲の向上をねらった（図５・６・７）。回を重ねるごとに講師に対する緊張もほぐれ、和やかな雰囲気で学ぶことができた。意欲的に取り組む子どもが多く満足度は高かった（表３）。

表２　ふれあい広場の主な活動

教わりながらチャレンジ	自分たちで考えてチャレンジ
体ほぐしの運動	野菜を育てよう
中国語に親しむ活動	市立図書館ってどんなところ？
手話に親しむ活動　（図５）	ランチ作り　（図７）
手作りペットボトルロケット	さつま芋ほり
手作りキャンドル	手作りおやつ
陶芸	大根ほり
折り鶴作り　（図６）	おでん作り
写真立て作り	さよならパーティー

図５　手話に親しむ活動

図６　折り鶴作り

図７　ランチ作り

表３　ふれあい広場の感想

・障害者の人たちの様子をみていて、大変なんだなと改めて思いました。今まではなにも思わなかったけれど、できたら何か手助けしたいという気持ちになりました。（中２Ｅ子）
・久しぶりに手話をしました。前回のことを少し覚えていたのでよかったです。手話でいろいろ表現したり、ゲームをしたりして楽しかった。（中２Ｂ男）
・正月用のかざりを折り紙でつくりました。講師の人がていねいに教えてくれたので、なんとかできました。手が真っ赤になりました。家に帰って玄関に飾ろうと思います。（小６Ｂ子）
・フレンド農園で大根をほりました。思っていたよりも大きかったのでビックリしました。自分たちが育てたものなので、早く調理実習をして食べてみたいです。（中３Ｆ子）
・さよならパーティーでみんなの前でギターを演奏しました。緊張したけど楽しかったです。みんな拍手してくれて、これからもギターを続けようと思いました。（中３Ｇ子）

③　マイプランタイム

子どもたちが自分のやりたいことを決めて取り組む時間で、自分自身を自由に表現できることを目指している。事前に読書、もの作り、調理、スポーツ、音楽などの中からやりたいことを選んで計画を立て、準備物なども自分で考えて用意した。スタッフもそれぞれの子どもに寄り添い、声を掛けた（図８）。自分の興味のあることに取り組めるので、どの子も満足そうな笑顔が見られた。

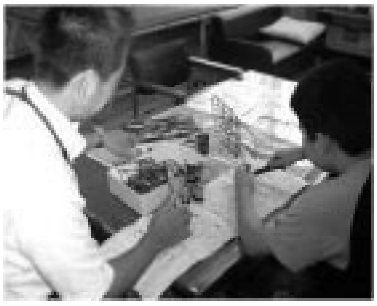

図８　プラモデル作り

④　フレンドタイム

バレーボール、バスケットボール、バドミントン、テニスなどのスポーツに、子どもたちとスタッフが全員で取り組む時間である（図９）。不登校の子どもたちは普段体を動かすことが少ないので、この時間を楽しみにしているようである。体を動かすことで気分転換を図り、集団スポーツを通して、お互いを認め合う交流の場としている。集団スポーツの中で活躍することで、「すごい」「やるなあ」とみんなに認められ、大きな自信を持つことができる子どもも少なくない。

図９　フレンドタイムの様子

⑤　社会体験学習

社会体験学習は、日常活動以外での様々な体験を通して、活動の範囲や視野を広げていくことを目的としている。自然や伝統的なもの、それにかかわる人の生き方に触れる活動、公衆道徳や集団としてのルールを身に付ける活動などを設定している。その中で、自分たちで活動計画を立てたり、仲間と触れ合い助け合ったりする経験を積むことができる。

18年度は福井県立恐竜博物館で化石発掘体験をした。初めて体験する子どもが多く、暑い日差しの中でがんばって捜す姿が見られた。係の人から自分の見つけたものが化石だと教えられた子は本当にうれしそうだった（図10）。越前竹人形の里では、職人が作った竹人形の美しさに驚いていた。その後実際に竹人形を製作し、その美しさを実感したようだった（図11）。

図10　化石発掘体験

図11　竹人形製作体験

⑥　宿泊体験学習

宿泊体験学習は、仲間と寝食を共にする体験を通して、友人関係を広げることや自ら進んで物事に取り組む積極性を養うこと、一つのことをやり遂げたという成就感を味わうことを目的としている。18年度は表４のような活動プログラムで、鯖江市や隣接する越前市・越前町ならではの特色ある体験学習を企画した。図12～17はその様子である。１日目には西山公園でウォークラリーをした後に、鯖江青年の家のゴールを目指してグループごとに歩く体験をさせた。実際に歩いた距離は５㎞を超え、かなりつらそうな子どももいたが全員が完歩できた。子どもたちの感想からも大きな自信になったことがうかがえる。３日目のネイチャーゲームは、子どももスタッフも初めての経験だった。講師の先生のわかりやすい説明で、自然の大切さを感じることができた（表５）。

表４　宿泊体験学習の活動プログラム

	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
11／8（水）						集合	体験学習１	昼食	体験学習２		入所式休憩	夕食	入浴		自由時間	就寝	
11／9（木）		起床清掃	朝食	準備	移動	体験学習３	昼食	移動	体験学習４	5	移動 休憩	夕食	交流学習		入浴自由時間	就寝	
11／10（金）		起床清掃	朝食	体験学習６				昼食退所式		移動	解散						

体験学習１ 草木染め （越前町「プラントピア」）	・プラントピア職員から、草木染めの歴史や原料についての説明をしてもらった後、実際に自分で選んだ色を使って草木染めを行う。 ・自然のすばらしさを感じながら、宿泊を伴う体験学習への不安や緊張を軽減する。
体験学習２ ウオークラリー （鯖江市「西山公園」から）	・鯖江市の自然や歴史、地域の人々に触れる。 ・豊かな自然にあふれた西山公園から、グループの仲間と協力しながら鯖江青年の家のゴール目指して歩き、自主性や協調性・忍耐力などを養う。
体験学習３ パン作り （鯖江市「ラポーゼ河和田」）	・パン作りを通して、子どもたちや指導員等の参加者同士の交流を図る。 ・ラポーゼ河和田の周りを友だちと散策し、交流する。
体験学習４ 紙すき体験 （越前市「パピルス館」）	・宿泊学習での思い出の作品を作ることを通して、ものづくりの楽しさを味わう。
体験学習５ 絵付け体験 （鯖江市「漆遊館」）	・宿泊学習での思い出の作品を作ることを通して、ものづくりの楽しさを味わう。
体験学習６ ネイチャーゲーム （鯖江市「鯖江青年の家」）	・鯖江青年の家の周りの自然に触れながら、身近な植物についての知識を学び、自然を愛する心を育てる。

図12　草木染め

図13　西山公園ウォークラリー

図14　パン作り

図15　紙すき体験

図16　絵付け体験

図17　ネイチャーゲーム

表５　宿泊体験学習の感想

・最後まで歩けて自分でもびっくりした。やったな、と思った。（中２Ｃ男）
・西山公園から歩いて疲れたけど、とても気持ちよかったです。（中３Ｈ子）
・初めてパン作りをして、本当に楽しかった。またやりたいな。（中１Ｃ子）
・森の中っていろいろあることが分かった。（中２Ｄ男）
・葉っぱをじっくり見ると意外にきれいだと感じた。（中２Ｄ子）
・自然を大切にしないといけないな、と強く思った。（中３Ｉ子）

２　家庭・学校・各適応指導教室との連携

(1)　家庭との連携

不登校の子どもにとって家族の存在は大きく、子どもを支える上で、家庭と連携することは必要不可欠である。学校復帰に向けた具体的なかかわり方について保護者との共通理解を図るため、定期的な面談を継続し、子どもへの対応に活かしている。

また、同じ悩みを持つ保護者が心を開いて話し合うことで悩みを軽減したり、相互に支え合ったりすることをねらいとして、「保護者のつどい」を年８回開催している。保護者は助言者から専門的な助言や子どもへの具体的な対応のアドバイスも受けている。この会を通して保護者同士が出会い、悩みを語り、お互いに支え合い、学び合いが深まるつどいになっている（表６）。

表６　参加した保護者の感想

・子どもが立ち止まる時、親も立ち止まっていろいろ考えたり学んだりする時なのかもしれません。普段落ち着いて気持ちを整理することは難しいのですが、つどいに参加して整理できたように思います。（中３女子　母）
・「目からうろこが落ちる」ことがたくさんありました。いろんな問題を抱えながら、それでも一時的に解消されたような楽しい時間を過ごすことができました。（小６男子　母）

(2)　学校との連携

①　電話および面談での情報交換

学校と共通理解を深めるために、電話で連絡を取り合ったり、必要に応じて来所面談をしたりして情報交換を行っている。フレンド学級での子どもの様子を伝えるとともに、子どもから学校の話題が出た時など、その都度連絡するようにしている。また、保護者の学校への願いを伝えることもある。学校からは学年や学校行事の予定を知らせてもらったり、保健室や相談室に登校できた場合はその様子を知らせてもらい、子どもへの指導・援助に活かしている。

②　フレンド学級月別報告書

フレンド学級に入級している児童生徒について、毎月、出席状況とフレンド学級での活動の様子などを各学校長あてに報告している。マイスタディタイムやフレンドタイムでがんばっている様子を伝えることで、担任が家庭訪問時に活用している場合もある。

③　先生とのふれあい広場

学校の先生と子どもたちがスポーツや歓談を通して心の交流を図り、学校復帰へのきっかけとなるように実施している（図18）。関係教員とスタッフとが、子どもたちについての理解を深め合い、具体的な支援の在り方について話し合う場も設けている。

図18　先生とのふれあい広場

④　チャレンジ期間

チャレンジ期間は、新しい学期の始まる前に設定され、子どもたちが学校復帰に向けて挑戦してみる期間である。スタッフと子どもたちが個別面談を行い、自分にあったチャレンジ期間の目標を決めている。先生とのふれあい広場で学校の先生と接したことがきっかけとなって、相談室登校を始めたり、学校行事に参加したりできる子どももいる。学校と連絡を取り合いながら、一人ひとりに合ったペースで進めている。図19はチャレンジ期間の取組みの流れである。

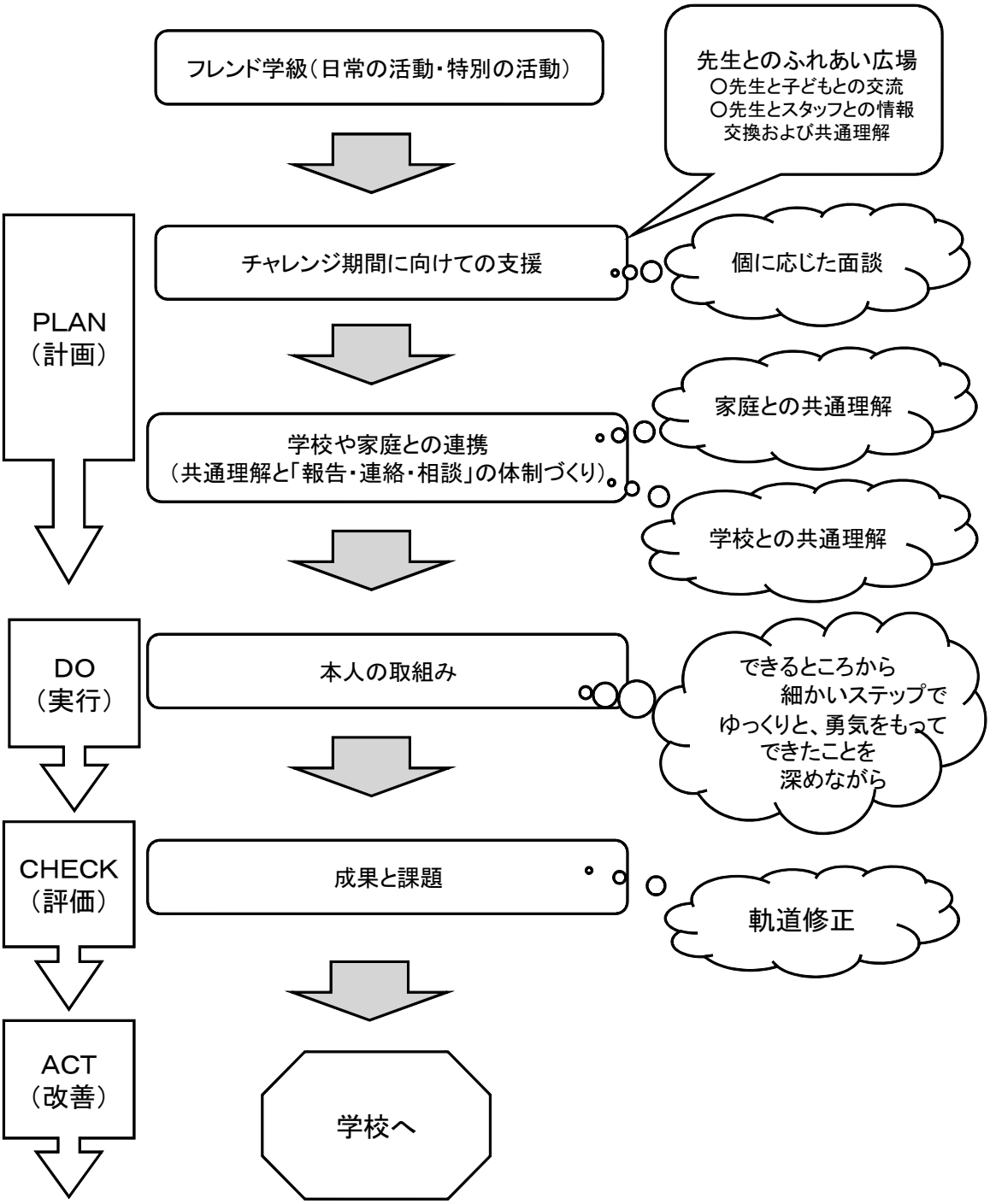

図19　チャレンジ期間取組みの流れ

⑤　学校訪問・ケース会議

スタッフが学校を訪問し、フレンド学級と学校との情報交換をするとともに、今後の指導・援助方法について協議している。これまではフレンド学級の担当スタッフと学級担任、学年主任、教育相談担当教諭、養護教諭と個々に話し合うことが多かった。18年度は学校の教育相談部との組織的連携を

試みた。事前に学校と連絡をとり、話し合いの期日・開始時刻・参加者・内容などの打ち合わせをした。時間帯も午後３時30分から午後５時までで設定し、学校の日程にできるだけ支障がないように配慮した。学校側の参加も積極的で、校長や教頭、支援員、スクールカウンセラー、民生委員の参加のある学校もあった（表７）。このように学校訪問をすることは、不登校児童生徒への指導にかかわる学校の組織づくりに向けた支援にもつながったと考えられる。

表７　学校訪問・ケース会議例

児童生徒	学年・性別	期　日	会場	参加した関係教員等
Ｆ子	中３女子	５／１ 9 15 26 ８／３ 24	適応教室 中学校 〃 〃 〃 〃	適応指導教室長　担当指導員 校長　担任　主任　教育相談 養護教諭　心の相談員　ｽｸｰﾙｶｳﾝｾﾗｰ 担任　主任 担任　主任 担任　主任 担任　主任
Ｂ子	小６女子	６/13 11/29	小学校 〃	校長　教頭　担任　教育相談 養護教諭 校長　教頭　教務主任　担任 教育相談　養護教諭　民生委員 心のﾊﾟｰﾄﾅｰ　訪問指導員
Ｃ男	中２男子	５／９ ６/16	中学校 〃	校長　担任　主任　教育相談 ｽｸｰﾙｶｳﾝｾﾗｰ　心の相談員 担任　主任　教育相談
Ｈ子	中３女子	６/14	中学校	校長　教頭　担任　主任　教育相談
Ｅ子	中２女子	10/６	中学校	校長　教頭　担任　主任 生徒指導　教育相談

(3)　各適応指導教室との連携

①　適応指導広域支援センター連絡協議会

県内市町の適応指導教室が、相互の情報交換を行いネットワークづくりを図ることを目的にして、年５回開催している。合同宿泊体験学習（ウィズ・フレンズ）や適応指導教室の運営について協議したり、専門講師による講演会で指導員の研修を行ったりしている。

② 事例研究会

事例研究会は、児童生徒の問題行動に関する諸事例を、心理臨床に造詣の深いスーパーバイザーに指導や助言を受けながら協議し、今後の相談活動に生かすことを目的としている。広域支援センターである当教育研究所を中心に年間18回計画している。各適応指導教室指導員のほか、各学校の相談員等にも幅広く参加を呼びかけている。各適応指導教室との定期的な交流が図られたことで、各種の行事や児童生徒の指導などについて情報交換するようになるなど、相互の連携を深めるきっかけとなっている（図20）。

図20　事例研究会

③ 合同宿泊体験学習（ウィズ・フレンズ）

県下の各適応指導教室に通う小中学生が、共同生活や体験学習を通してお互いに協力し合ったり交流を深めたりしながら、達成感や成就感を得ることを目的に実施している。また、各適応指導教室の指導員の研修および情報交換の場として、体験学習の指導を通して資質の向上を図ることもねらっている。表８は18年度の活動プログラム、表９は参加者数である。17年度に引き続き、適応指導教室近くまで送迎したり、参加できる体験学習への部分参加を認めたりしたことで、小中学生と指導員合わせて56名という多数の参加があった。図21～25はその様子である。

活動プログラムについては、開催地である若狭町や隣接する市町の適応指導教室指導員を含む「体験活動プログラム検討会」で見直しに取り組んだ。18年度はサイクリング、スノーケリング、丸木舟乗船体験など子どもたちがあまり経験したことのない野外活動を多く取り入れた。このような活動をきらう子どもや不安を感じて途中であきらめる子どももいるのではないかと心配したが、全員が最後までやり遂げることができた。野外炊さんについては、竹ご飯・豚汁作りに初めて挑戦した。自分たちで火をおこし、ご飯を炊く器や食器をのこぎりを使って作るというなかなか大変な活動だった。暑い中での作業だったが、一人ひとりが働かないと食べられないということで、どの子も一生懸命に取り組んでいた。食事の時にはどのグループも和やかな笑顔が見られた。また、グループ活動ばかりではなく全員でする活動も経験させたいとの思いから、キャンプファイヤーを活動プログラムに入れた。燃え上がる炎を囲んで歌ったりゲームをしたりするうちに子どもたちの連帯感が深まったように思う。

子どもたちの感想（表10）からは、友だちや指導員と一緒に体験したことで初めての活動にも挑戦でき、充実感や達成感を味わえたことがわかる。また、それが自信につながったのではないかと思われる。参加した子どもたちからとったアンケートでも満足度は高かった（図26）。

表８　合同宿泊体験学習（ウィズ・フレンズ）の活動プログラム

日	時　間	活　動　内　容	
7月 12日 （水）	９：００	バス出発　　春江～森田～教育研究所～越前市～	
	１１：５０	三方青年の家着　出会いの式　昼食	
	１２：４０	体験学習１　「サイクリング　湖畔散策」	水月湖周辺
	１５：４０	体験学習２　「竹ご飯・豚汁作り」	三方青年の家
	１９：００	ふれあいタイム	
	２２：００	消灯・就寝	

7月 13日 (木)	７：００ ９：００ １７：４０ １８：３０ ２２：００	朝の集い　朝食 体験学習３　「ビーチクラフト　スノーケリング」 「シアター　魚の餌やり」　県海浜自然センター 夕食 体験学習４　「キャンプファイヤー」 消灯・就寝
7月 14日 (金)	７：３０ ９：００ １２：１０ １３：００	朝の集い　朝食 体験学習５　「丸木舟乗船体験と勾玉作り」　三方縄文博物館 昼食 退所式　バス出発　越前市～教育研究所～森田～春江

表９　参加適応指導教室別の参加者数

	児童生徒数	指導員数
① 福井市「チャレンジ教室」	4	3
② 越前市「希望学園」	2	2
③ 敦賀市「ハートフル・スクール」	0	1
④ 坂井市「フレッシュ学級」	3	1
⑤ 坂井市「オアシス春江」	4	2
⑥ 大野市「フレッシュハウス」	0	1
⑦ 高浜町「はまなす教室」	0	1
⑧ 若狭町「三方ふれあい教室」	0	1
⑨ 若狭町「上中ふれあい教室」	0	1
⑩ 教育研究所「フレンド学級」	１０	１０
⑪ 嶺南教育事務所「フレンド学級」	3	5
⑫ その他		2
合　　計	２６	３０

図21　サイクリングと湖畔散策

図22　竹ご飯・豚汁作り

図23　ビーチクラフト・スノーケリング

図24　キャンプファイヤー

図25　丸木舟乗船体験・勾玉作り

表10　参加した子どもの感想

- 自然を見ながらサイクリング出来たのはすごくうれしかった。途中でサルを見つけたのには驚いた。もう２周ぐらい行けそう。（小６Ｂ子）
- 竹ご飯づくりでは、竹がなかなか切れないことと暑さとで、汗だくになりいやになりました。でもみんなが役割を果たしてなんとか完成しました。食べてみるとすごくおいしかったので、それまでの苦労がふっとびました。（中２Ｂ男）
- スノーケリング、最高でした。今日は塩分がたっぷり取れたので控えめでよさそうです。（中３Ｊ子）
- スノーケリングでは、初めてクラゲに触れたり、ウニを食べることができました。（小５Ａ子）
- キャンプファイヤーは人生ベスト５に入るほど印象に残った。（中２Ｃ男）
- 丸木舟体験では、揺れて落ちそうになったり前に進まないので、命の危機を感じました。でも、しばらくしてなんとか前に進むことができるようになり、達成感を感じました。（中２Ｄ子）
- 正直あまり楽しみにしていなかったけど、実際に体験してみると、おもしろくてやりがいがあるなあと感じました。どの活動も思い出に残る体験になりそうです。みんなと協力してこれだけのことをやり遂げたという満足感でいっぱいです。また行きたいです。（中３Ｈ子）
- 他の教室の子とも仲良くなれました。いろいろな人と気軽に話ができるようになりよかったです。人と接することが楽しくなり、少し自信がもてるようになりました。（中１Ｃ子）

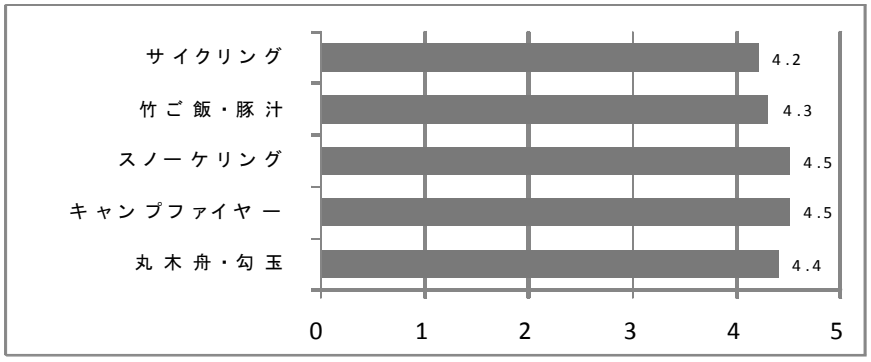

図26　体験学習満足度

Ⅴ　研究の成果と今後の課題

1　研究の成果

(1)　フレンド学級での活動プログラム

子どもたちの事後の感想から、「マイスタディタイム」では個別指導、小集団指導の充実に努めた結果、子どもたちは「分かる喜び」を実感できたのではないかと思われる。また、「ふれあい広場」では専門的な知識を持つ講師を多数依頼したり、何回か継続して取り組む活動を入れたりすることで意欲の高まりが見られ、「学ぶ楽しさ」を味わうことができたようである。

(2)　家庭・学校・各適応指導教室との連携

①　家庭・学校との連携

スタッフが学校を積極的に訪問し、教育相談部とケース会議を開いたり、保護者と定期的な面談を継続して行ったりすることで､学校復帰に向けた具体的なかかわり方について話し合うことができた。

②　各適応指導教室との連携

合同宿泊体験学習プログラムについて、開催地や隣接する市町の適応指導教室指導員を含む「体験活動プログラム検討会」で、見直しに取り組んだ。サイクリング、スノーケリング、キャンプファイヤー、丸木舟乗船体験など、子どもたちがあまり経験したことのない野外活動を多く取り入れた。特にスノーケリングや丸木舟乗船体験は、以前の活動プログラムにはなかった、子どもに不安や緊張を与える活動であった。しかし、友だちや指導員と一緒に挑戦できたことで、むしろ充実感や達成感を得た子どもが多かった。このことが子どもたちの自信につながったのではないかと考えられる。

以上のような取組みの結果、平成19年４月までに18名中14名が学校復帰を果たした。特に中学３年生は７名全員が目標とする高校に進学することができた。表11はある中学３年生の感想である。

表11　フレンド学級の感想

もう少しでフレンド学級が終わります。これから先のことを考えると少し不安です。でも、この学級に通うことで、何でも自分から進んでやろうと思うようになりました。ここでがんばってきたことを次に活かしていきたいです。(中３Ｇ子)

2　今後の課題

(1)　不登校の長期化への対応

在籍校への復帰を果たした子どもがいる一方で、不登校が長期化しフレンド学級在籍が長引いている子どもも多い。その要因の一つとして、集団に適応する技術＝ソーシャルスキルの不足がうかがえる。そこで、今後はソーシャルスキルを育てることに、より重点をおいた活動プログラムの開発やスタッフのかかわりが必要だと思われる。

(2)　進路指導の充実

中学生の場合、自分が不登校であるということで自信を失い、高校へ進学できないと思っている生徒がいる。今後、スタッフが県内外の高校に関して、オープンスクールなどの案内を含めた様々な情報を提供できるようにすべきであろう。

また、不登校が長期化したために、目標とする高校に入学するには学力が不足している生徒もいる。フレンド学級においてどのような形で学力を保障していけるかも課題である。

(3)　各適応指導教室との連携

合同宿泊体験学習については、全体的にスタッフ側が活動プログラムを設定しているため、子どもたちの自主性が育たないのではないかという意見があった。今後、体験学習の中に子どもたちが自主的に企画し実行するような活動プログラムを意識的に設定していくことも、有効ではないかと考える。

また、宿泊を伴うような体験学習には抵抗があって参加できない場合や、指導員が１人のため対応できない場合もある。今後交流学習を推進していくためには、宿泊体験学習での交流ばかりではなく日常活動での交流を増やしていくことが望まれる。

《参考文献》

○福井県教育研究所・福井県教育庁嶺南教育事務所（2007）『平成18年度フレンド学級研究報告書第17号』
○福井県教育研究所（2007）『平成18年度適応指導広域支援センター事業報告書』